

【論考】

ブリテン諸島の日本人大学院留学生にみる 異文化間友人関係形成

Cross-Cultural Friendship Formation of Japanese International Graduate Students in British Isles

岡山大学大学院社会文化科学研究科 鉄川 大健

TETSUKAWA Hirokatsu

(Graduate School of Humanity and Social Science, Okayama University)

岡山大学大学院社会文化科学研究科 田中 共子

TANAKA Tomoko

(Graduate School of Humanity and Social Science, Okayama University)

キーワード：異文化間友人関係形成、認知行動的ソーシャルスキル、海外留学

序論

留学生にとって、留学することには様々なメリットが存在するが、同時にそれは困難な体験でもある。そのため、滞在国でいかに異文化適応を果たしていくのかは、留学生にとって大きな課題となっている。田中(2000)は、現地の人（以下、ホスト）との対人関係形成は留学生の適応課題の1つであるが、一方でその関係形成自体が適応の有効な手がかりにもなると述べている。また、Ward & Kennedy(1999)は、ホストとの異文化における良質な対人接触が、留学生の社会文化的適応を促進する可能性を示唆している。異文化における対人関係形成は、こうした観点からみれば異文化適応の基盤といってもよいだろう。本研究では、対人関係の中でも滞在国（以下、ホスト国）で学ぶ学生や同世代の人々との関わりを特に重視する立場から、留学時の異文化間友人関係に焦点を当てる。

異文化間友人関係については、異文化適応を促進する機能が注目される。高濱・田中(2009)は、友人関係形成が適応方略の獲得を促すとし、園田(2011)は、異文化での友人関係の構築が異文化適応の要因になりうることを示した。留学生の友人関係形成の背景にある要因としては、コミュニケーション能力や友人との肯定的体験の共有などが議論されている(工藤, 2003; 小松, 2013)。だが異文化間

友人関係を形成する方略や、具体的なプロセスを解明しようとした研究は少ない。これらの問いを解こうとすることは、異文化圏での良好な友人関係形成を促し、異文化適応を促進するための教育的試みの道を拓くことに繋がる。良好な友人関係形成が構築され、速やかに異文化適応が実現されていくなら、滞在先での充実した学生生活を後押しすることができ、豊かな国際交流の実現にも繋がっていくと思われる。

英語圏は日本人学生の留学先として注目が高い。イギリスとアイルランドを含む欧州ブリテン諸島は、英語圏の国であり、特にイギリスは、日本学生支援機構(2017)によると、在籍大学の協定に基づかない日本人留学生数が、アメリカ、オーストラリア、カナダに次ぐ第4位と多い。大学院留学は学位取得のため留学期間が長期にわたり、現地に根付いた生活をする必要があるため、現地で対人関係をじっくり形成していくことの意義は高い。そこで今回は、欧州ブリテン諸島（イギリス及びアイルランド）に所在する大学院への留学経験者の協力を得て、その友人関係形成に焦点を当てた。

本研究の目的は、日本人留学生の異文化間友人関係形成をめぐる、彼らがホスト国で友人関係を形成するために、どのような対人行動を実践しているのかを調べることにある。

方法

研究協力者 欧州ブリテン諸島にある大学院への留学経験を持つ日本人女性3名(年齢25~35歳)を対象に、半構造化面接を行った。留学先の国はイギリス及びアイルランドであり、留学期間は12~54か月である。調査時点では帰国後1~2年が経過していた。Table 1に研究協力者のデモグラフィック情報を示す¹。

Table 1 研究協力者のデモグラフィック情報

研究協力者	年齢	留学国	留学期間	帰国時期	居住スタイル	所属校
A	32	イギリス	42か月	X-3年	フラットシェア	語学学校 + 大学院
B	25	イギリス	12か月	X-2年	フラットシェア	大学院
C	34	アイルランド	54か月	X-2年5か月	ホームステイ → フラットシェア	語学学校 + 大学院

面接調査 以下に示す、筆者の設定した留学中の友人関係に関する6つの質問を軸に、半構造化面接を行った。平均面接時間は、67分41秒 ($SD=15$ 分04秒)であった。

- ① 留学前、留学時の自分についてどのような考えを持っていましたか。
- ② 現地に元々知人がいましたか。現地の人と関わりを持つ機会がありましたか。

¹ 表内、帰国時期のXは面接時の年数を示す。

² SD (標準偏差): 分散の正の平方根であり、平均からの偏りを示す値である。

③現地の友人とどのようにして知り合いましたか。現地の友人を作ることに関し、どのような考えを持ち、どのような行動をしましたか。

④現地の友人と関係が続けたり、深めたりする中で、どのような行動が理解しにくかったですか。現地の人の理解できない行動に対し、どのような考えを持ち、どのような対処をしましたか。

⑤日本での友人関係と現地での友人関係を比べた時、どのような点で差異を感じますか。同じ点はありますか。

⑥現地での良好な友人関係を築き、保つための心がけや工夫はありますか。

分析 面接時の音声データから逐語録を作成した後、大谷(2008, 2011)の開発したSCAT³(Steps for Coding and Theorization)に基づいて、4つのコーディングステップによる質的データ分析を行った。

手続き 初めに研究協力者に対し、研究内容の概略と倫理的配慮に関する説明を行い、研究協力の承諾が得られた後で、同意書に署名してもらい、半構造化面接を実施した。面接時には、研究協力者の許可を得てICレコーダーにより語りを録音した。

結果

SCATによる分析の結果、欧州圏への留学生の語りは『留学前の予測』、『困難への直面』、『留学動機・目的』、『差異の認知』、『友人観に基づく友人選択』、『友人関係』の大きく6つのテーマから構成されると考えられた。以下では、SCATによって得られた結果として、テーマを『 』、サブテーマを「 」、カテゴリを【 」、サブカテゴリを[]で示し、サブカテゴリの詳細を《 》で示す。斜体の文は面接における研究協力者の発言、()内は筆者による補足、< >内は筆者の発言である。なお方言は標準語に直し、固有名詞は記号化するなど、プライバシー保護の観点から表記を調整した。

1. 留学前の予測

異文化間友人関係に関する『留学前の予測』として、C氏は漠然とした【コミュニケーション不安】を語っていた。しかし、A氏は【留学前の友人関係不安】など様々な不安を抱える反面、【事前留学経験に基づくコミュニケーションの楽観的認知】がみられた。またB氏は対人関係以外の不安は感じていたものの、【留学前の対人不安はない】としていた。以下に、各々の語りを示す。

【コミュニケーション不安】

ちゃんと先生の指導についていけるか。語学的な面もありましたね。<語学の中にも読んだり、書いたり、話したり、聞いたりってのもあるんですかね?>そうです。全部です。(C氏)

³ SCAT：面接内の語りから逐語録を作成し、それぞれの語りから、①データ内の注目すべき語句を抽出、②その語句(①)のいいかえを記述、③それらを説明するような語りの外の概念の記述、④これまでのステップで浮き上がったテーマ・構成概念の記述、の4つのステップでコーディングを行い、記述されたすべてのテーマをつなげたストーリーラインを作成し、そこから理論化する手続きからなる分析方法である。大谷(2008, 2011)を参照。

【事前留学経験に基づくコミュニケーションの楽観的認知】【留学前の友人関係不安】

馴染めるかどうかはちょっと不安、でもあまり人見知りしない、すごく仲の良い友達ができるかって不安はそこまで期待してなく、生活上コミュニケーションをとるくらいはできるかな。(A氏)

【留学前の対人的不安のなさ】

行ってみないとわからない部分があったんで、(人間関係の)これが不安とかそういう感じはなかったです。(B氏)

2. 困難への直面

異文化間友人関係に関する『困難への直面』は、【困難の経験】と【困難への対処】という2つのカテゴリから構成されていた。【困難の経験】には、困難状況の原因帰属が内向的な[スキル不足]や[言語理解的困難]などに加えて、原因帰属が外向的な[ホスト集団の排他的態度]や[外国人コミュニティでの不快感]などが含まれていた。さらに、困難に直面することにより不適応状態を呈した[知識不足による授業内友人関係への不適応]、[留学後期の社会的不適応]などが含まれていた。【困難への対処】には、問題を直視していく問題焦点的な[外国人の理解できない行動の取り入れ]⁴対処や、気持ちの安定を図る情動焦点的な[趣味によるストレス解消]対処があり、さらに、回避的な[日本人感覚の投影的合理化によるイベント不参加]や[経済的ゆとりのなさによるイベント不開催]が含まれていた。以下にこれらの例を示していく。

【困難の経験】

ビジネスを分かる体で授業のグループワークをされると、お金の話とか分からないんで。ちょっと苦労しましたね。(B氏, [知識不足による授業内友人関係への不適応])

【困難への対処】

牛乳とか買って、私今日牛乳使わないといけないものがあるって帰ってきたのに、あれ、牛乳ない、って言ったら、あー、飲んだ、みたいな。今度買ってくるから、って。私は今日必要だったのに、っていうのも、ま、いいかみたいな。その代り私も同じようにしても、何も思わないんだ、ってのがわかるから。そうか、じゃあ、良いかって思えたら、それもオッケー。(A氏, [外国人の理解できない行動の取り入れ])

夜ごはんが違う。夜ごはん食べに行こうよとか、パーティこの時間からやるからとか言われて行くと、日本人はたいてい7時とか8時とかに夜ごはん食べるんですけど、ヨーロッパでは10時くらいから食べ始めるんで。だから、そんなに遅い時間にパーティに出たら、明日授業出れないなって言うのもあったし。(中略)夜9時くらいからご飯食べようといわれても出かける気が起きなかったですね。

⁴ 行動の取り入れ：他者の理解できない行動を、自分も同じようにしても良いんだ、と思い自分もその行動を行うようになることを示す。他者の行動を自分の行動に取り入れることを示す。

日本人の感覚で言ったら、そんな時間から食べたら胃もたれするとかあるんで。(B氏, [日本人感覚の投影的合理化によるイベント不参加])⁵。

3. 留学動機・目的

異文化間友人関係に関する『留学動機・目的』について、C氏を例に説明する。C氏は留学初期には【学業達成留学動機】や【友人関係動機への主体性の弱さ】などがみられ、留学の動機や目的の中に友人関係形成の比重はそれほど大きくなかった。しかし、留学が進むにつれ、[飲みニケーション]などの【友人関係形成動機の高い他の留学生の使用する関係開始方略】の実践をし、最終的には【友人関係形成動機に基づく努力】をするようになった。

【学業達成留学】【友人関係動機への主体性の弱さ】

別に、この人と何が何でも友達になってやるって思って関わるわけではないので、あまり意識はしていないですけど。

デパートメントであう人はやっぱり勉強しに来ているんで、お互いに、確認し合って、困ってることがあれば手伝い合う感じで。(C氏)

【友人関係形成動機の高い他の留学生の使用する関係開始方略】【友人関係形成動機に基づく努力】

友達を作ることも留学の目的の1つとして考える人は、それが良いとっかかりになると思いますね。ガッツがあれば。こっちから、飲みいかない?って言ってみたりとか、あと、すごく気を使ってくれる人ばっかしだったんで、みんな優しいなって思うところが多くて、見習わないとなと思いましたね。

相手を尊重すれば向こうも尊重してくれるとか。仲良くなろうと努力すれば、ある程度それは伝わるとか。(C氏)

4. 差異の認知

異文化間友人関係をめぐる『差異の認知』は、【日本文化の特有性】、【日本とホスト国の比較】、【日本人と外国人の比較】という3つのカテゴリから構成されていた。【日本文化の特有性】には、謙遜や遠慮などの[表現理解の文化的差異]、【日本とホスト国の比較】には、コミュニティ間の出入りに関する[期間限定滞在者とホストコミュニティの分離]、【日本人と外国人の比較】には、他国留学生等との文化的差異を示す[日本人と外国人の共有に関する認識の差異]が含まれる。

【日本文化の特有性】

D(専門分野)に行きたいと思ってても、Dの勉強何もしてなかったし。てなったら、日本人やったら、遠慮するじゃん。で、そうなる謙遜するから。そしたら、向こうからすると何もない人みたい

⁵ 投影的合理化：SCATによる分析により生成された語句であり、自分の受け入れられない不都合な状況を日本人全般の考えだと思い込み、それを正当化することを指している。

なことと一緒にいるから、何も言えなくなる。それでも、つてのは向こうは何も言ってくれないから。

(A氏, [表現理解の文化的差異])

【日本とホスト国の比較】

イギリス人の塊は、留学生からしたらハードルが高くて、まず話してることが何話してるか分からない。イギリス過ぎて。訛りもあるし、早すぎるし、ネガティブだし。そういう部分で入りづらい。あと、外のものがあまり好きじゃないので、あまりこっちから行ってもウェルカムな感じでは受け入れてくれない。その塊がばらけたら、1人1人はすごく良い人なんですけど、固まってしまうとちょっと今は止めておこうと。個人個人だと関わりやすいですけど、イギリス人で固まられちゃうとやめておこうとなりますね。(B氏, [期間限定滞在者とホストコミュニティの分離])

【日本人と外国人の比較】

果物とかも置いとくけど、全部部屋に入れとくのもあれだからさ、だから、置いとくと、食べて良いつても聞かずに、普通に食べてるからね。で、食べてたら、今度自分が買い物行ったときに買ったけがいい、って感じの人が多いから。でも、日本人って、やっぱり一人暮らしって感覚があるから、そこまで自分のものを勝手に触られたりとか、勝手にされるの嫌、たぶん。でも外国人からしたらそこまで。お前今バナナ食べなくても死なないやろみたいな、ごめんねとは言うけど、そこまで深刻に考えてないっていうような人がいたりする。(中略) 塩とか、トイレトペーパーとか、洗剤とかも、誰かが買ってきて、使って、無くなったら、この間は誰か買ってきたから、今回は自分が買おうかなみたいな。だからルーティーンだね。特に調味料とかはそうゆう感じ。だから、それが見てたら、わかるよね。日本人なら、この人も塩持ってるし、この人も塩持ってるし、この人も塩持ってるし、同じ塩でも。でも外国人はそれ一個にしたら良いみたいな。だから、これみんな使おうねってのが増えていく、外国人の場合。でも、日本人の家行くと、いつの誰のみたいなのは共有スペースには置いてあるけど、みんな結構自分でも持ってるみたいな。(A氏, [日本人と外国人の共有に関する認識の差異])

5. 友人観に基づく友人選択

異文化間友人関係に関する『友人観に基づく友人選択』には、【友人観に基づく友人関係形成選択】と【希薄な友人観】が含まれていた。

【友人観に基づく友人関係形成選択】

クラスメイトに関しては、この授業のあの話題どう思うとか、そういう話ができるし、みんな同じような関心事があって集まった人たちだから、授業以外の部分でも盛り上がるし、良いんですけど、別にクラブとか行ってチャライ感じの人たちに出会う必要性は感じなかったですね。でっかい音楽がバンバンなって、みんながお酒あおってるような環境もそんなに好きじゃないし。(B氏)

【希薄な友人観】

流動的やね、私。大学の時は大学の友達でいるけど、今はもう、大学の時の友達も、自分からあんまり連絡したりしないかな。(中略) そんなに連絡することもないからまず、用事も。〈留学中は?〉まあまあ一緒。(A氏)

6. 友人関係

最後の『友人関係』は、5つのサブテーマから構成されており、それぞれ「ホストとの異文化間友人関係」、「他国留学生との異文化間友人関係」、「日本人留学生との友人関係」、「ホスト国生活者との異文化間友人関係」、「全般的異文化間友人関係」であった。なお留学中の友人の構成を語りから読み取ると、A氏は【他国留学生>日本人留学生>ホスト】と、他国留学生の友人が最も多く、次に日本人留学生、最も少ないのはホストであった。B氏は【日本人留学生=他国留学生>ホスト】と、日本人留学生と他国留学生は同程度の友人が存在したが、ホスト友人は最も少なかった。C氏は【ホスト>日本人留学生>他国留学生】とホスト友人が最も多く、次いで日本人留学生、最も少ないのは他国留学生の友人となっていた。

「ホストとの異文化間友人関係」 「ホストとの異文化間友人関係」には、6つのカテゴリが含まれていた。【ホストの対日本人態度】には、[友好的態度]と[非友好的態度]があり、後者では《排他的態度》へ対処である《明確な自己呈示による態度変化》について語られていた。加えて、[行動様式の妥協的取り入れ]や[ホスト性格の受容と取り入れ]などの【ホストの行動模倣】があった。【ホストとの関与機会】に関しては、[ホストとの関与機会の少なさ]や[ホストとの関与機会の少なさへの無関心]など、ホストと関わる機会に関するネガティブな語りが目立った。それから、【ホストとの関係形成利益】として[困らないための情報]などが出現していた。【対ホスト異文化間友人関係形成スキル】には、《時間共有》などの[関係維持のための行動スキル]や、《自己呈示》などの[関係形成のための行動スキル]がみられた。一方で、【対ホスト異文化間友人関係不形成スキル】として、[阻害要因としてのホスト文化的職場の回避]などが見出された。

【ホストの対日本人態度】

こっちがある程度ちゃんと勉強して、最低限話せるとか、なんか知ってるとか、専門があったりとか、そうすると、向こうはちゃんとそういう対応をしてくれる。でも、わかりません、外国から来たんで、ははは、って言う人には、表面的には、うんうんって笑ってるけど、対応はすごく馬鹿にするよねっていう感じはある。(A氏、《排他的態度》)

何でもいいから、専門というか、私はこういう人間ですってということとか、何を学んで、何をしておか、何ができるとか、何をやってきたみたいなのを、ちゃんとすぐ出せるようにしといたら、逆にびっくりするくらい違う対応、ちゃんとリスペクトな対応で。あれ?って言うくらい。じゃあ、今度

からこれで行こう、みたいな。(A氏, 《明確な自己呈示による態度変化》)

【ホストの行動模倣】

この時間に集合ねとか言っても、集合時間にやっと支度が終わる。だいぶ遅れてくる。3か月くらいしてから、この時間からパーティやりますとか言われて、その30分後くらいに行くようにしました。どうせみんな来ないんで。遅れてやっとちょうどいい。(B氏, [行動様式の妥協的取り入れ])

【関与機会】

あっちにイギリス人があまりいた覚えがなくて、もちろん現地に住んでる人もいるんですけど、大学自体にイギリス人がそんなにいない。〈残念では?〉残念とかはなかったですけど、イギリス人こんなにいないものなのか、とは思いましたね。〈関わりたいとは?〉それは特になかったですかね。(B氏, [ホストとの関与機会の少なさ]、[ホストとの関与機会の少なさへの無関心])

【ホストとの関係形成利益】

現地の人は、イギリスではこうだからとか、みんなどう?みたいな。電車の乗り方とか、バスも乗れるし、どこどこ行こうってなって、バスは、これを買って、お金ここに入れて、ピッてしてとか。こういうところで食べたら高いよとか、こういうところはぼったくるから気を付けてねとか。(A氏, [困らないための情報])

【対ホスト異文化間友人関係形成スキル】

(イギリス人の友人)3人くらいは、よく休み時間とか。あと一緒にやる課題とかあったんですよ。それを一緒にしたりですね。女の子が1人いて、あとは男の子でした。親友は難しい。(A氏, 《授業外時間・授業課題遂行時間共有》)

「他国留学生との異文化間友人関係」 「他国留学生との異文化間友人関係」には、4つのカテゴリが含まれていた。[紹介者としての仲介者]と[スーパーバイザーとしての仲介者]からなる【他国留学生仲介者】がいた。そして[困った時の共感的理解]や[必要な生活術共有]など、【他国留学生との関係形成利益】が得られていた。【他国留学生との接近欲求】には、[接近欲求]と[留学生との関係満足]などが含まれていた。【対他国留学生異文化間友人関係形成スキル】には、《年齢的近接性》、《環境的類似性》、《会話の類似点》、《時間共有》などの類似点や共通点を見出すことなどから成る、[関係形成のための行動スキル]、そして《受動的イベント参加》や《飲みニケーション》などの[関係開始のための行動スキル]から構成されていた。

【他国留学生仲介者】

友達ができたのは本当にF国の子のおかげなので、その子がいなかったら、結構厳しかったかもなって思いますね。結構短期留学の子が多いとこだったんで、外国の人ってなったら、どうしても、すぐ帰っちゃうんでしょってなって、現地の学生はなかなか仲良くなろうとしない傾向があるって、F国

の子も言っていたんで。だから、F国の子も、深く関わる友達を作るのに苦労したから、入れてくれたってのもあって。(C氏, [紹介者としての仲介者])

すごい心配そうな顔してたと思います。だから、慣れるまでは、F国の子とかが、大丈夫、ジョークだよってこっそり言ってくれたりしてました。(C氏, [スーパーバイザーとしての仲介者])

【他国留学生との関係形成利益】

そこに住んでる普通のイギリス人とかなら、普通に契約するんですけど、契約もできないんですよ、留学生は。どこに住んでるとか、何年住んでるとか、そういうのがないとばっくれるので、契約自体してくれないんですよ。だから、どうしたら携帯が持てるとか、みんなどうしてるのって聞いたら、みんなプリペイドで。そんな感じで、とりあえず行ってみて、安いのあったみたい。やったーみたいな。(A氏, [必要な生活術共有])

【他国留学生との接近欲求】

<現地の友人は作りたいとは思わない?>なんか別にどうしても白人が好きってのはなかったし、そんなに必要というか、クラスメイトにヨーロッパの人もいっぱいいたので、改めてそういう風には思わなかったですね。(B氏, [留学生との関係満足])

【対他国留学生異文化間友人関係形成スキル】

G国人の女性で、年齢も近くて、1個(才)か2個(才)しか変わらなくて、彼女の方が上なんですけど。年齢が近かったのと、彼女もそんなに働いた経験がない、インターンで働いたことがあるくらいで、ほとんど私と同じような環境から来ていたので、話も合うし、一緒に遊びに行くことも多かったし。グループワークとかも一緒にやってたんで、彼女は今でも連絡とるくらい仲良かったです。(B氏, [関係形成のための行動スキル])

月に1回くらい語学学校の生徒と先生も一緒にやるアクティビティみたいなのあるじゃないですか。みんなで、クラブ行こうとか、みんなでどこどこ行こうとか、みんなで飲み行こうとか。それに最初の方はあんまり興味なかったんですけど、でもやっぱりちょっとは仲良くなった方がいいから、たまに暇なときは行ってたんですよ。で、それ行くと、やっぱりグンッと仲良くなりますよね。そんなに仲良くないのに、喋らないのに、お酒飲むとか、酔うとか、ふと気づいたら、かなり友達みたいな雰囲気になる時あるじゃないですか。(A氏, [関係開始のための行動スキル])

「日本人留学生との友人関係」 「日本人留学生との友人関係」には、6つカテゴリが含まれていた。日本人との関わりを避ける【日本人留学生回避欲求】を語る者もいれば、[現地日本人コミュニティ参加]や[日本人留学生との接近欲求]などの【文化依存的親和欲求】があるため、【関係開始の容易性】を感じる者も多かった。また、困った時にはすぐに頼ることができる【日本人仲介者】の存在もあった。そして、ホスト国では[関係形成スキル日本人ネットワーク形成]や[自文化優位的職場への接

近]などの【対日本人友人関係形成スキル】があり、そのことにより《非外国感》を感じていた。一方で、[過度な遠慮による友人関係形成困難]という【対日本人友人関係不形成スキル】が存在していた。

【日本人留学生回避欲求】

日本人同士で固まっていたわけではないので、日本人とアジア人と、アジアで固まってることが多かったですね。実際いつも一緒にいた友達はG国とH国の子でしたね。(B氏)

【文化依存的親和欲求】

2軒隣の日本人の方に日本人学校のアルバイトを紹介していただいて、その先生方とは学校帰りに飲みに行ったりしましたけど。(C氏, [現地日本人コミュニティ参加])

あと、I国生まれの40歳くらいのJ(日本的な名前)っていうI国人がいましたね。絶対日本人やと思ったら、単に名前がJっていう。(中略)お父さんが日本が大好きなI国人で、子供にJってつけただけ。私はその人が日本人やと思って探してたんですよ。でも、誰も日本人いないなって。あれーおかしいなって思ってた、JはI国人だったっていう。(A氏, [日本人留学生との接近欲求])

【関係開始の容易性】

初めはやっぱり、同じクラスの子で、特に日本人がいたら、言葉も通じるし、向こうも同じ経験をしてきてるので、次これが大変とか、これやったとか。(中略)日本人だっていうだけで、第一関門突破で。そんなに親しくなかったはずなのに、何でも聞くじゃないですか。(A氏, [日本人アイデンティティ]、[日本人との親密化])

【日本人仲介者】

最悪、知り合いも1人いるので、相談できる相手。その子も、イギリスに行っていたので、なんとなく物価とか事情とか私より知っていたので、相談できる相手がいたので、心強いというか。(A氏, [スーパーバイザーとしての仲介者])

【対日本人友人関係形成スキル】

G国とH国の子たちは日本人の輪の中に入ってきていたので。もちろん会話は英語ですけど。(B氏, 《日本人ネットワークの形成》)

現地のイギリス人しか雇ってないようなお店はダメだなと思って。で、近くに、歩いて10分以内のところに、大きなKっていうショッピングセンターができたんですよ。そこにL(日本企業)が入ってたんですよ。日本人いるじゃないですか。交渉できる相手は日本人じゃないですか。(A氏, 《自文化優位的職場への接近》)

「ホスト国生活者との異文化間友人関係」 「ホスト国生活者との異文化間友人関係」は、【ホスト国生活者との関係形成利益】と【対ホスト国生活者友人関係形成スキル】の2つのカテゴリからなり、主にA氏の語りに見られた。【ホスト国生活者との関係形成利益】は、生活していく上で困らないため

の情報を提供されることによって、[リスク未然防止]や[社会的困難の軽減]がはかられる、という内容である。【対ホスト国生活者友人関係形成スキル】には、ホスト国生活者を主体的に支援する《日本文化的表情認知の教授的支援》など、[関係形成のための行動スキル]や、加えて彼らと関係を形成するときの考え方である《返報性》や《対等性保持》など、[関係形成のための認知スキル]が含まれていた。

【ホスト国生活者との関係形成利益】

生活していく上では、こっちの方（現地で生活している人）が役に立った。留学生は、同じ経験をしてきて、同じ失敗をしてきてるけど、もう一方は、失敗をしない方法を知ってるから、ここに住んでるから。（中略）留学生だけだったら、みんなでワーワー言っただけで、仕方ない、そういう世界もあるよって終わってたけど。そういう時にはやっぱりこっちの方（現地に生活している人）が役に立つ。（中略）なんか（問題が）あった時自分が不利になるとかいうことも知らずに、これがイギリスだと思って生活してるわけで。でも、それをこっちに言ったら、それ絶対やめた方がいいよって、あ、そーなんだ、何て言ったらいいの？って。そういう正規のルートを一応教えてくれる。そういう時には、こっちも知っとかないと、痛い目見るといふか。（A氏、[リスク未然防止]、[社会的困難の軽減]）

【対ホスト国生活者友人関係形成スキル】

L企業なんで、日本の企業じゃないですか。だから、タグとかに日本語とかがついてると働きに来てくれている人も、〇〇これ何書いてんの？って聞いてくれる。向こうも聞きたいことあるし、だからこっちも聞きやすい。マネージャーが日本人で、一番怖い人が日本人だったんで、マネージャー今怒ってんの？とかそういう情報交換ができて、タイタイ（トントン）だったんですよ。でもね、大学院やとね、教えてもらうとかなると、圧倒的に向こうから教えてもらうことが多くなるので、距離感が難しい。やっぱりタイタイ（トントン）の方がいいじゃないですか。（A氏、《日本文化的表情認知の教授的支援》、《返報性》、《対等性保持》）

「全般的異文化間友人関係」 「全般的異文化間友人関係」は、大きく分けて4つのカテゴリによって構成されていた。大学院という環境の中で、様々な友人と関わるうちに【友人への劣等感】を感じ、【異文化での友人関係形成利益】を感じる者がいた。また、【異文化での友人関係形成スキル】及び【異文化での友人関係不形成スキル】では、友人関係の開始・維持・発展・拡大・形成・継続に資する行動スキル・認知スキルが含まれ、以下を含む数多くの事例が述べられた。

【友人への劣等感】【異文化での友人関係形成利益】

年齢が違ったので、向こうのマスター（修士課程）って、1回働いて仕事を辞めてきてる人がすごく多くて、大学からストレートで大学行ってる人はすごく少なくて、大人の中に子供が混ざってる感じでした。社会を経験した人がたくさんいたので、そういう中において、知らないことだらけだなんて

思いましたね。(B氏)

【異文化での友人関係形成スキル】

習い事を途中から始めて、そこで自分でも友達を作りました。(C氏, 《主体的な友人関係形成》)

私の得意なことが相談を受けることなので、相談の聞き役になることがすごく得意で、そういうぐちゃぐちゃな人間関係について話を、いろいろ話をしていくうちに、この人話を聞いてくれる人ってのが伝わっていて、いろんな相談をされるようになったので、そういう意味で(得意分野を使う)。(C氏, 《受動性による得意分野の自己呈示》)

お寿司とか。みんな持ち合うか、お金徴収するかだから、そんな負担にはならないし。みんな片づけて帰ってくれるし。いくら(払う)みたいな感じが、作った料理とか飲み物を持ってくるとか。だから、メインの御飯だけ作っとけば、飲み物とデザートはもってきてくれる。(中略)たまには(パーティを)開かないとダメ。開きたくなくても。あのりに会いたいな、このりに会いたいな、そのりとも会いたいなってなった時、このりのパーティ行ったらいいけど、あのりとそのりには会えない。そういう時に開いたら、一番いい、みんなに会えるから。(A氏, 《イベントでの自文化浸出的呈示》《友人関係ネットワーク構成員のメンテナンス》)

【異文化での友人関係不形成スキル】

元々英語そんなに得意ではなくて、勉強してそのあと遊びに行っ、また次の授業に話がつながれるのかっていったら、私の場合そうじゃないので。ちゃんと勉強はしないと、しかも高いお金親に払ってもらっているんで勉強はしないとと思っていたので。なんで、勉強時間に重点を置いて生活をしてきたところもあるので。もちろん遊びに行くときは行っていましたが、遊ぶための友達はいなくていいかなと。(B氏, 《学業的留学動機による娯楽的關係回避》)

パーティとか呼ばれたら行くけど、長居もしないし、夜遅いから帰り道嫌だしってのもありましたね。(B氏, 《受動的イベント参加》、《短時間イベント参加》、《治安不安》)

22,3(オ)の子ばかりのグループに30くらいの外国人が来て、ここで話してることも、もちろん言葉も早いし、喋ってる中にいて、まあでもいさせてもらってるけど、でも、笑ったときに、それ何?って解説聞くのも悪いし、でも、そこがわかるまで、私の英語力はないし、向こうも逆に大丈夫?ってなることに気使うかなってなるから、そこにいるけど、理解できないことのほうが多かった。イギリス人が来て、理解できなくなったら、やっぱりなんか距離感ありますよね。何回もわからないわからないって言うのもだし。だからある程度流して。(A氏, 《親密關係性困難》)

なお、Table 2に分析による抽出された異文化間友人関係形成スキル及び不形成スキルを示す。

Table 2 分析により抽出された異文化間友人関係形成スキル

テーマ (サブテーマ)	カテゴリ	サブカテゴリ	サブカテゴリの詳細	
留学前の予測	肯定	肯定的予期	語学、学術	
		日常生活への適応的認知		
		楽観的認知	日常生活、学業、事前留学経験に基づく学業・語学・コミュニケーション	
		不安のなさ	留学前の対人的不安のなさ、留学前の全般的不安のなさ	
	否定	否定的予期	環境	
		覚悟	環境・食事	
		不安	留学前の友人関係・コミュニケーション・学術・金策・生活困窮・経済的不安、留学初期の生活困窮	
		留学の実感のなさ		
困難への直面	経験	不快感情	現地への嫌悪感、外国人コミュニティでの不快感、生活困窮解消のための努力による不快感情	
		困難感	ホストとの普遍的友人関係形成・友人関係発展、コミュニケーション、他国留学生との友人関係維持、個人特性の差異実感、留学時の対人交流、アクセント、言語、言語理解、環境	
		偏見	冷遇、排除	
		困難回避欲求	衣食住、経済	
		不適応	知識不足による授業内友人関係、社会	
			文化共通の友人関係形成スキルの不足	
			友人相互作用における利益の限界	
	対処	努力	語学力不安をカバーする試行錯誤	
			生活困窮解消のための努力	情報収集、我武者羅な努力
		消極的対処	言語理解困難への対処	日本文化的遠慮
			非経済的関係維持方略の不使用	電話
			日常生活への困難感	学校、既知友人
			外国人の理解できない行動	取り入れ、楽観性
			語学力不足	講義録音、先生>生徒
			ストレス解消	趣味
留学動機・目的	内発的動機	新規性追求、達成		
	学業達成動機			
	友人関係動機	主体性の弱さ		
		友人関係形成動機の高い留学生の友人関係開始方略		
	友人関係形成動機に基づく努力	得意分野の自己呈示、関係形成利点の自己呈示		
差異の認知	日本とホスト国の比較	文化的行動様式の対比		
		集団	集団凝集性の差異、集団の在り方の違い、期間限定滞在者コミュニティとホストコミュニティの分離	
		差異の発見	人種の差異を楽しむ、就職行動の文化的ギャップ経験	
		共通点の発見	かわり方、礼儀、察し	
		慣れない食習慣	自己犠牲的対処、体得の諦め、自炊制限、金銭的余裕のなさ	
	日本文化の特有性	日本人コミュニティ	非排除志向性	
		対人交流方略の理解	遠慮、謙遜	
日本と他国の比較	対人関係	年齢的文化差、経験的文化差		
	認識の差異	共有感覚、在留資格		
友人観に基づく友人選択	友人選択	目標のある人>ワイワイしている人、効率性、気が合うかどうか、授業関連話題、同一関心事、仲良くなりたいかどうか、ホストの人種的区別		
	関係性による行動選択	友人観に基づく友人との普遍的関係と特定の関係		
	希薄な友人観	日本での親友関係の少なさ 希薄な友人観に基づく日本とホストの同質的友人関係の実感		
友人関係形成	友人関係形成(全般)	友人への劣等感		
		友人関係形成の利益	語学、年齢超越的友人関係による日本での職場への容易な適応、職業関連情報収集、相互援助	
		友人関係形成	関係開始 侵襲性の低い自己呈示、飲みニケーション、積極的関与、受動的関与、挨拶、文化特有趣味の開始、情報交換、初期イベント、自己呈示、授業時間共有、スモールチャット、日本文化呈示、初期の能動的会話、中期の受動的会話、イベント参加、実直な性格、友人選択	

		関係維持	察する力、飲みニケーション、メール、直接会話、語学力、定期的日常会話、イベント主催、イベントへの誘い、サーカズム（ジョーク）、ネットワークのメンテナンス、行動の自然な取り入れ、イベントの工夫、初期の能動的会話、中期の受動的会話、非侵襲的傾聴、旅行、非浸出的日本文化呈示、	
		関係発展	紹介者としての仲介者、イベントへの誘い、イベント参加、サーカズム（ジョーク）、行動模倣、友人の新しい側面の発見	
		関係形成	機会	大学院、大学院よりも語学学校
			形成	返報性、快感情の自己呈示、気を引く自己呈示、得意分野の自己呈示、スモールチャット、挨拶、自文化の浸出的呈示、対等性の保持、主体性、イベントの誘い、友好的関わり、行動模倣、行動の変換的取り入れ、偏見を持たない
			不形成	夕食やパーティの時間的相違、性格的友人選択、経済的ゆとりへのなさ、治安的不安、日本人感覚の投影的合理化、学業的留学動機、娯楽的關係回避、単独行動、関係形成回避性格、受動的イベント参加、イベントの中途退室、過剰配慮、コミュニケーション不良、親友関係の諦め
		関係拡大	積極的イベント参加、イベント主催、紹介者としての仲介者	
関係継続	語学力、定期的日常会話としての挨拶			
友人関係 (ホスト)	ホストの友好的態度	日本文化への肯定的感情、自己呈示・自己開示によるホスト態度の友好的変化、ホスト個人の良好な人間性、ホストの優しさ		
	ホストの非友好的態度	排他的態度、ホスト行動のルーズさ		
	関与機会	職場>学校、大学の授業、単独受講、近所、仲介者づて、ホストよりも留学生との関与機会の多さ		
	関係形成利益	日常生活方法、困らないための情報		
	友人関係形成スキル	維持	授業外・授業課題の遂行時間共有	
		形成	自己呈示、自己開示、ホスト行動様式の妥協的取り入れ対処、ホストのルーズな性格の受容、ホストのルーズな性質の取り入れ	
	友人関係不形成スキル	発展	ホストとの疎遠な関係	
		形成	ホスト同士の集団化、ホストコミュニティの排他的態度、留学生アイデンティティの見下し、親密関係性困難、ホスト行動のルーズさ、ホストとの関与機会の少なさへの無関心、ホストとの関与機会の少なさによる非積極的関与、言語的困難、	
継続	ホストとの疎遠な関係			
友人関係 (他国)	仲介者	紹介者としての仲介者、スーパーバイザーとしての仲介者、仲介者の援助、友人コミュニティ参加、仲介者の配慮		
	他国留学生との接近欲求			
	関与機会への満足感			
	情報共有の利益と容易性	必要な生活術共有、情報収集、困った時の共感的理解、信ぴょう性の高い情報		
	友人関係形成スキル	開始	受動的イベント参加、飲みニケーション	
形成		年齢的共通点、環境的共通点、会話共通点、授業時間共有日本人集団の親和性、遊び時間共有		
友人関係 (日本人)	日本人仲介者	相談、情報収集、安心材料、生活支援		
	文化依存的親和欲求	友人関係形成欲求、快適性、自文化フィールドでの活動、自文化優位的職場への接近、現地日本人コミュニティでの友人関係形成		
	日本人留学生回避欲求			
	関係開始の容易性	親密関係、言語的無障壁、同一事態経験者、日本人アイデンティティ		
	友人関係形成スキル	情報共有、時間共有、非外国感の経験、ネットワーク形成		
	友人関係不形成スキル	過度な遠慮		
友人関係 (生活者)	友人関係形成利益	リスクの未然防止、社会的困難の軽減		
	関係形成スキル	返報性、日本文化的表情認知支援、対等性保持、積極的生活関連情報収集		

考察

日本人留学生が留学中にどのような対人行動を実践し、どのように異文化間友人関係を形成していくのかを辿っていったところ、3名の持つパターンが浮かび上がってきた。

併存的スタンスのA氏

留学初期には、人と知り合う機会になるようなイベントへの参加には乗り気でなかったが、参加したところ友人ができ、その後は友人関係形成に前向きになっていった。日本人の遠慮や謙遜がホストとの友人関係形成に支障をきたすことが分かってからは、日本文化に準拠した対人行動の実践をやめて、自分から積極的に自己呈示をするなど、現地で社会文化的に受け入れられる行動に換えていった。

A氏は、元来友達と深く付き合っていくほうではないとしつつも、日常での友人との関わりは多く、自分のニーズに見合った友人選択を実践していた。友人のサポート提供機能は、属性によって分化していた。ホストや現地で生活する他国の友人からは社会生活に関する情動的サポート、留学生からは留学生活に必要なサポート、留学生以外の人からは各々の特性に応じた多様なサポートを受けていた。また日本人や他国留学生とは異文化滞在者として共感し合い、安心感などの心理的なサポートを得ていた。

友人関係性を維持し拡大するためイベントを開催し、日本文化をうまく使って留学生の友人を作り、職場でも周囲と関わるよう努めていた。その結果、異文化体験が広がり友人も増えていった。友人関係を築いた相手とは積極的に関わり、会う機会を自分で作り出すなどネットワークのメンテナンスにも励み、関係を維持していた。

A氏は、渡英以前に培った友人関係形成の価値観や方法を基盤としつつ、自分の中の日本文化を意識したり、現地の文化になじむ方法を適宜使ったりしながら、その場にふさわしい自分を構築していくという意味で、いわば二文化の併存的なスタンスをとっていたといえる。

固定的スタンスのB氏

B氏は、学業達成を自己実現と強く結びつけていた。友人には、心理的サポートをさほど求めておらず、共に遊びに行くようなコンパニオンシップにも関心は薄かった。学業に必要な情動的サポートを得るべく、実のある関わりに関心を向けていた。渡英当初は日本人との接近を避けていたが、その後は日本人コミュニティを作り、そこに関わってくる留学生とは付き合っていた。この意味では受け身ではあるものの、形成した友人関係には充足感を抱いていた。勉学に役立つ人という友人選択の方針は明確で、友人作りの対象となる者は限定されていた。

日本人の感覚では考えられないような、ホスト文化に基づいた行動が繰り返される現地のイベントには参加しなかった。自文化の規範にそぐわない場を避けたことで、友人関係を開始する機会自体が減ることにもなっている。これを、以前から持っていたフィルター越しに物事を評価し、それに合うように物事を選んでみるとみれば、新しい環境にあってもわりと固定的なスタンスをもって、友人関

係形成にのぞんでいるといえるかもしれない。

文化開発的スタンスのC氏

元来友人関係形成には消極的な方だったというが、他国人留学生の友人ができ、その人が友人を紹介してくれて、関係拡大の仲介者として機能した。この人は友人関係形成のキーパーソンで、かつ対人行動のモデルにもなった。現地での友人作りの行動を見習ったことが役立ち、友人関係が広がった。他者の行動から学び、自らその行動をまねることで友人関係形成が進んだという点では、友人作りを目指して行動の選択と実践を戦略的に行ったといえる。友人関係形成を図る行動を身に着けたC氏は、さらに新たな友人を求めべく、習い事を始めるという行動を起こした。

日本人留学生や他国留学生との関係には、心理的サポートを求めていた。相談の聞き役になることが得意と自覚していたC氏は、待ち受けて話を聴くだけでは受動的に過ぎると考えて、話を聴くために自分から話しかけるという行動を起こした。

異文化圏での対人交流において、自文化では行っていなかった行動を新たに自分のものとし、異文化間友人関係形成を前進させている。これは異文化を取り込んで新しい自分を作っていく、いわば開発的なスタンスといえるかもしれない。

総合考察

今回の3人に共通するのは自らの友人観や友人の持ち方が基盤にあることで、そのうえで異文化を取り入れたり、自文化を維持したり選択的に使ったりと、文化的な対応の仕方が選択されていっていた。すなわち異文化において友人関係を形成する際のスタンスには、文化との向き合い方の多様性が認められる。

A氏は、自ら能動的に対人関係を築き、友人関係を広げていたが、その方略をみると、自文化とホスト文化の2つの文化が併存している。自文化に準拠した認知行動的基盤の上に、ホスト文化で受け入れられる形に調整した認知や行動が積み重ねられ、A氏にとっての友人関係形成のソーシャルスキルが行使されている。

B氏は、学業達成に必要な関係に限定した友人関係を築いた。その方略には、自文化で築いてきた考え方や関わり方の維持がみてとれる。そして自文化の規範に合うかどうかという観点から、友人との関わりも選択している。B氏の友人関係形成のための考え方と行動の仕方、すなわち認知行動的ソーシャルスキルは、文化的に変容することが少なかったといえよう。

C氏は、文化的な行動を模倣しながら新しい自分を作りだす努力を、主体的に行っていた。新環境で得られる友人関係形成のチャンスを活用していき、その中でホスト文化となじみ、新しい認知行動的ソーシャルスキルを身に着けて、友人関係形成を進めていった。

では異文化間友人関係形成は、どうしたら発展させられるか、対人行動の実践という観点から、最

後にこの問いを考えてみたい。まずホストに限らず現地で生活する他国人との間にも、異文化間友人関係は構築される。異文化滞在者としての対等さと共感からそこに関わりやすさを覚える場合は、相互の文化交換の一助として日本文化を効果的に使うことが考えられる。

ホストに対しては、意識的に行動を観察したり取り入れたりして、現地の社会文化的文脈の中で適応的な対人行動を実践することが考えられる。日本で培ったソーシャルスキルをもとに、現地の文化に合う形へと変換していくことができれば、幅広い異文化間友人関係形成を進める役に立つだろう。この意味では、固定的な文化観だと関係形成の幅を狭める可能性があるだろう。ただし留学の意図次第で、友人関係形成にあまり重きを置かない異文化滞在スタイルも考えられる。文化的態度の選択と友人作りの能動性の度合いの組み合わせとによって、異文化間友人関係形成は分岐していくものと思われる。

【謝辞】本研究の一部は、科学研究費補助金（15H0345617/代表：田中共子）の助成を受けました。本稿の一部は、鉄川大健・田中共子（2015）「日本人留学生におけるホストとの友人関係形成：欧州圏への留学に関する事例的検討」（日本応用心理学会第82回大会、10頁）の口頭発表に基づきます。」

引用文献

- 小松翠（2013）. 中国人女子留学生の友人形成及び友人不形成に至る過程に関する研究. 群馬大学国際教育・研究センター論集, 12, 71-86.
- 工藤和宏（2003）. 異文化友情形成におけるコミュニケーション能力:留学生の知覚に基づくモデル化の試み. *Human Communication Studies*, 31, 15-34.
- 日本学生支援機構（2017）. 平成28年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果. 日本学生支援機構.
- 大谷尚（2008）. 4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案：着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学), 54, 27-44.
- 大谷尚（2011）. SCAT: Steps for Coding and Theorization: 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. *感性工学*, 10, 155-160.
- 園田智子（2011）. 短期交換留学生の異文化適応に関する調査報告：主観的適応感と関連要因を探る. *留学生交流・指導研究*, 14, 75-85.
- 高濱愛・田中共子（2009）. 在米日本人留学生による滞米中のソーシャルスキル使用：留学前ソーシャルスキル学習の受講者と非受講者の場合. *留学生交流・指導研究*, 11, 107-117.
- 田中共子（2000）. 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル. ナカニシヤ出版.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1999). The measurement of sociocultural adaptation. *International Journal of Intercultural Relations*, 23-4, 659-677.